

『教行信証大意』の研究

黒田 浩 明

一 はじめに

親鸞の主著である『顕浄土真実教行証文類』は、今日一般的に、題号の通りの教・行・証の三法ではなく、『教行信証』の四法をもって呼称される。親鸞自身がこの著作について『教行信証』と呼称した例はなく、いつ頃からこの名称が用いられるようになったのか不明であるが、『教行信証大意』(以下、『大意』)という著作の表現が嚆矢であるともされる。⁽¹⁾

その『大意』は、写本のみ現存し表題もないため、著者も定かでなく、同内容の写本でも題号が異なるものが散在する。題号の異例を挙げれば、『教行信証名義』『真宗大綱御消息』『教行証題鈔』『真宗相承鈔』(以上、『真宗全書』目録による)の他、『教行証大意』(恵空仮名聖教目録)『教行証名義』(恵空自筆本外題)『教行信証ノ大意』(高宮聖教目録)『教行信証篇』(月筆聖教目録)『信行ノ篇』(同)『教行証文類意記』(京都西方寺本)『四法大意』等の名称があり、『文類聚鈔大意』とも呼ばれる。

このように不明の点が多いテキストであるとはいえ、古来、訓詁的註釈を施した『六要鈔』に対して達意的註釈書と理解され、特に近世までの『教行信証』研究において、大いに用いられてきた、という点は重視すべきであろう。

本研究ではこの『大意』を課題として採り上げ、まず著者についての考察を踏まえつつ、本書が本文前半に示す『教行信証』の位置づけを確認する。また、この著作が教・行・信・証・真仏土・化身土の六巻の要旨をどのように押さえているのか、近代以降の真宗学の見地と対比しながら、検討していくこととする。

二 『大意』の書誌、および撰述者について

多数存在する『大意』の異本であるが、先行研究によれば、大きく分けて二つの形態があるとされる。すなわち、『教行証文類意記』(京都西方寺本)をはじめ『教行信証名義』(河内慈願寺本)『教行証名義』(恵空自筆本)など、序文や結語を欠

くものと、序文や結語の存在するそれ以外の写本である。先学は前者を略本、後者を広本と位置づけている。⁽²⁾そして、いわゆる広本における結語の、

さればこの教行信証真仏土化身土の教相は聖人の己証当流の肝要なり。他人に對してたやすくこれを談ずべからざるものなり。あなかしこ⁽³⁾。

という表現が蓮如篇の『真宗用意』の表現と酷似し御文形式をとっていることから、増補された箇所全体、ないし一部分が蓮如の加筆によるものとも推定されている。⁽⁴⁾

『大意』の撰述者については所説有り、覚如説、如信説、蓮如説、従覚説、存覚説などが挙げられるが、従来、本願寺派では覚如説、大谷派では存覚筆・蓮如加筆というのが定説とされている。

覚如説の根拠となっているのは、『慕帰絵詞』第十に乗専が覚如に帰属するエピソードにおいて「本願先徳集記したまう『教行証』六帙の大綱をも請益する」⁽⁵⁾という記事によるのであるが、やや証拠としては乏しい感がある。しかもこの記事の内容の元弘元年（一二三二）は、『大意』奥書に示される嘉暦三年（一二三二）の四年後であって時代が前後している。

一方で、覚如説を否定し、存覚著作とする根拠となっているのは、雲華院が『大意要須録』に龜陵の説を引用して明かすところの説による。すなわち、

『教行信証大意』の研究（黒田）

第一、一巻の顛末を見るに、覚師御老後の作とその筆体に於て頗る相似ざること。

第二、慕帰絵詞に覚師の御製作をあぐる中教行信証大意を載せざること。

第三、今本の所明は粗々六要鈔の所説と同様なること。

という理由である。⁽⁶⁾

ただし、存覚説も決定的なものとは言えない。なぜなら存覚自身が製作した聖教目録である『浄典目録』（存覚は自身の著作もここに聖教として掲載している）をはじめ、『一期記』『鑑古録』『山科記』などにも、『大意』が存覚の著作であることを示す記述がないからである。さらに、古来指摘される『六要鈔』との内容的相似についても疑問符が付く。妙音院了祥の『一枚起請文講義』⁽⁷⁾ならびに『異義集』⁽⁸⁾などにおいて「大意の如き真身観仏身の説六要に相違し、自余亦台主とおもひがたき事多し」というように、『教行信証大意』における「化身土巻」の解説として示される『観経』の真身観に対する了解が、『六要鈔』のそれと異なる（『六要鈔』は、真身観の仏について真仮両面を見るが、『大意』では化仏とのみ押さえる）ということが指摘されているからである。

したがって、有力説である覚如・存覚著作説も、いずれも十分に立証できず、本書の著者は判ずることが出来ないと思われるべきであろう。むしろこの書は蓮如によって書写され、以

『教行信証大意』の研究(黒田)

降の本願寺教団で聖教として重んじられてきたという事実を目を向けなくてはならない。

三 『教行信証大意』の撰述意図

『教行信証大意』の撰述意図は、冒頭に、

近代はもてのほか法義にも沙汰せざるところのをかしき名言をつかひ、あまつさへ法流の実語と号して一流をけがすあひだ、言語道断の次第にあらずや。よくよくこれをつゝしむべし。しかれば当流聖人の一義には、教行信証といへる一段の名目をたて、一宗の規模として、この宗をばひらかれたるところなり。このゆへに親鸞聖人、一部六巻の書をつくりて『教行信証文類』と号して、くはしくこの一流の教相をあらはしたまへり。

と示されるとおり、親鸞一流の法義にそむく言論をいさめ、親鸞の主著である『教行信証』によつて一流の教相を確かめる姿勢を説き勧めることにある。そして、そのために教・行・信・証の大略を示すことが、この書の主旨であることが分かる。

しかしこのことは親鸞自身の教化姿勢に沿ったものとは考えられない。なぜなら親鸞は、御消息に、

さきにくだしまいらせそふらいし、『唯信鈔』・『自力他力』などのふみにて御覧さふらふべし。それこそ、この世にとりてはよきひとくにておはします、すでに往生をしておはしますひとくにてさふらへば、そのふみどもにかゝれてさふらふには、な

にごともく、すぐべくもさふらはず。法然聖人の御をしへを、よくく御こゝろえたるひとくにておはしますにさふらひき。さればこそ往生もめでたくしておはしましさふらへ。

というように、吉水教団における法兄である聖覚・隆寛らの『唯信鈔』・『後世物語』・『自力他力』をもつて門弟の信心問題に対応しようとしているからである。同内容の消息が多く書き記され、それらの著作に対する註釈(和語聖教)を書写し関東に送つてもいる。このような事実から考えても、親鸞が念仏の信心に対する論争を、自著である『教行信証』をもつて門弟に示して対処する意図はなかつたであろう。しかもこの消息の表現では、自身の教学を披瀝するよりも、師である法然の教えの真意を明らかにするというスタンスが明確である。

こうした親鸞の教化姿勢に対して、『大意』は、『教行信証』の内容を忠実に要約しようとするよりも、親鸞以後において、法然流に対して親鸞流を独立せしめんとする者の意図が強く押し出されているといえる。

四 『教行信証』研究における『大意』の地位

『大意』の内容を管見するかぎり、教・行・信・証・真仏土・化身土の六巻構成について体系的に把握しようというものはなく、単純に各巻の要旨を並列的に述べるに留まっている。

しかも親鸞の『教行信証』における表現をそのまま簡略化したものというよりは、真宗教義の全体像から内容を意識したものであることがわかる。この書が達意的註釈書と位置づけられる所以である。しかし、それでは教学の表層面を確認したに過ぎず、『教行信証』本文の文脈に対する学的検討を経て「大意」が示されているわけではない。

『大意』に対する講義本は江戸期から明治初期にかけて多く製作されている。⁽¹¹⁾それらの内容は『教行信証』本文と『大意』を対照して検討するというよりも、そもそも達意的註釈である『大意』の内容に対し、さらに訓詁的註釈を施すものがほとんどである。そうした学的営為によつては、真宗教教学のテクニカルタムを押さえ、基礎知識を得ることは出来たとしても、原典である『教行信証』の精神を窺い、その教相を体系的に把握するということは難しかったと思われる。

近代以前には、『教行信証』の研究は、『浄土文類聚鈔』や『六要鈔』を通してしか行うことが出来なかったということである。これらの事情と、先述の『大意』のテキストとしての性格をあわせて鑑みると、『教行信証』本文を直接拝読することが憚られた時代において、『教行信証』に明かされる親鸞教学の大略を押さえようとする上で、この『大意』が重んじられてきたのであろう。

『教行信証大意』の研究（黒田）

五 『大意』の解釈と、『教行信証』各巻における構造

『教行信証』と『大意』における表現の異なりは、本文全体において散見される。ここで『大意』における教・行・信・証・真仏土・化身土の解説の一々を検討して問題点を列挙することは出来ないが、その一例を挙げれば、『大意』において真実行が、

これを行すれば西方の往生をえ、これを信すれば無上の極証をうるものなり。⁽¹²⁾

として、明確に衆生の能行とのみ位置づけられているという点は注目すべきである。こうした行の位置づけは、名号のはたらきと諸仏の称名を大行の内容とする『教行信証』の立場とは異なるものだからである。また、「信巻」の解釈についても、

第三に真実の信といふは、かみにあぐるところの南無阿弥陀仏の妙行を真実報土の真因なりと信ずる真実の心なり。⁽¹³⁾

というように、南無阿弥陀仏の妙行が真実報土の真因であるとされるが、親鸞においては、

正定之因⁽¹⁴⁾唯信心なり

と、往生の因が信心であるという姿勢で一貫している。『大意』でも、直後に、

『教行信証大意』の研究（黒田）

これすなはち、まめやかに真実の報土にいたることはこの一心に
よるとするべし。⁽¹⁵⁾

とされるのであるから、定義が不統一と言わざるを得ない。
行信は不離のものであり、両者を分別して検討することには
慎重でなければならぬが、『大意』の表現は、全体的に行
信について、機の側の問題として位置づけているように見受
けられる。

また、文面に表れない問題として挙げられるのは、真宗の
大綱として『教行信証』『教巻』冒頭に掲げられる往還二回
向の問題や、六巻の構成それ自体が持つ有機的関係性につい
て、全く言及されていない点である。

往還二回向が何故示されないのか、という問題は、

しかれども、この書（『教行信証』）あまりに広博なるあひだ、
末代愚鈍の下機にをひてその義趣をわきまへがたきによりて、一
部六巻の書をつゞめ肝要をぬきいでて一巻にこれをつくりて、す
なはち『浄土文類聚鈔』となづけられたり。この書をつねにまな
こにさへて一流の大綱を分別せしむべきものなり。⁽¹⁶⁾

と、本文中にも示唆されるように『大意』の解釈が、直接に
は『教行信証』よりも『浄土文類聚鈔』に依っていることに
起因すると考えられる。教相の書とされる『教行信証』に対
し、安心の書といわれる『浄土文類聚鈔』には、往還二回向
の問題が地位を後退させられているからである。先に確認し

たとおり、一流の安心を明らかにすることが本書の狙いであ
るがゆえに、二回向を軸とすることが避けられているのであ
ろう。

また、六巻それぞれの関係性について論じられることがな
いことも、本書を通しての『教行信証』の内容的検討を目的
としたものでない証拠である。『大意』には、一般的な了解
としての真実五巻と方便一卷という対比もなされていない。
曾我量深、金子大栄などの大谷派近代教学の先哲によって、
『教行信証』自体の文脈に直接あたりながら、その構造性を
検討する営みがなされるにつれ、⁽¹⁷⁾『教行信証』研究において
『教行信証大意』は重要視されなくなっていくことは、必
然であったと言える。

六 おわりに

結論として、この『大意』は『浄土文類聚鈔大意』とも題
されるように、実質的には、真宗の教相としての『教行信証』
の構造性を著したものであるというよりは、『教行信証』を根本聖
典とするという、一流の安心を明らかにすることに重点をお
かれた著作である、と言うことが出来る。詳細な検討は割愛
するが、むしろ教・行・信・証・真仏土・化身土それぞれの
関係性の問題は、各巻の解説それ自体のうちに埋め込まれて
いるのである。それ故に一見して、原典である『教行信証』

の表現との乖離を生じさせている。そのことはあくまでも本書の性格が、教学の研鑽を目的とするのではなく、一般教化の場におけるガイドラインを示すためのものであったことも示している。

- 1 稲葉秀賢『教行信証の諸問題』（法蔵館、昭和四五年）参照。
- 2 日下無倫『真宗史の研究』（平楽寺書店、昭和六年）四九一頁参照。
- 3 『真宗聖教全書 三列祖部』六二頁。
- 4 桑谷観宇『教行信証大意』の一考察（『宗学研究』九）一三二頁参照。
- 5 『真宗聖教全書 三列祖部』八一〇頁。
- 6 瓜生津隆雄『教行信証大意』に於ける一問題（『宗学院論輯』五、一九七六年）二二一頁参照。
- 7 『真宗全書』五七 二五八頁。
- 8 『真宗大系』三六 六八頁。
- 9 『真宗聖教全書 三列祖部』五八頁。
- 10 本願寺本第三通、『末灯鈔』第一九通（『真宗聖教全書 二宗祖部』六八六頁）。
- 11 小野玄妙編纂『仏書解説大辞典』（大東出版社）参照。
- 12 『真宗聖教全書 三列祖部』五九頁。
- 13 『真宗聖教全書 三列祖部』五九頁。
- 14 『真宗聖教全書 二宗祖部』四五頁。
- 15 『真宗聖教全書 三列祖部』五九・六〇頁。
- 16 『真宗聖教全書 三列祖部』五八頁（括弧内筆者）。
- 17 曾我量深は前二巻を「伝承の巻」後四巻を「已証の巻」と位

『教行信証大意』の研究（黒田）

置づけている。また、金子大栄は後二巻を軽視する風潮に対して、前四巻を「回向の巻」後二巻を「報酬の巻」ないし「莊嚴の巻」と位置づけ、二部作『教行信証』と提起する。（稲葉前掲書参照）。

凡例

- ・敬称は略す。
- ・旧漢字は新漢字に置き換えた。
- ・原文がカタカナ送りの場合、定本に従いひらがな送りに変更した。

〈キーワード〉 親鸞、『教行信証大意』、『教行信証』、覚如、存覚

（同朋大学佛教文化研究所客員所員・博士（文学））